

顕浄土真実教文類一（四）

高田短期大学学長 栗原廣海

一、釈尊出世の本意

釈尊が五つの徳をおあらわしになり、神々しく光り輝いておられるのは、これから素晴らしい説法をなさるための準備に違いありませんとの阿難の確信のことに、釈尊は、「梵天や帝釈天等の諸天があなたに教えて、私の所へ来させて、そのような質問をさせたのか、それとも、自らの智慧で私の威顔を見て、これから私が素晴らしい説法をすることを察して問うたのか」と問われたのでした。

阿難は、「諸天が私のところへ来て教えてくれたではありません。私が拝見したままを申し上げてそのわけをおうかがいしただけです」と申し

とのない大悲の心で、迷えるあらゆる人々を哀れんでいるのである。だから如来がこの世に出現する理由は、教えを明らかにして人々を救うためであるが、特に深い迷いに沈む人々の恵みのために、真実の利益となる教え、すなわち、弥陀の本願・名号を説こうとしているのである。しかしこの如来の教えに出遇うことはきわめて難しいことで、三千年に一度花を咲かせると言われる優曇華が花を咲かせたその時に会おうほどまれなことである

すなわち、釈尊が五つの徳をおあらわしになり、神々しく光り輝いておられるのは、深い迷いに沈む人々を救い恵むために、真実の利益である弥陀の本願・名号を説こうとしているからであると言われるのです。換言すれば、なぜ弥陀の本願を説く『無量寿経』の教えが「真実の利益」となる教えであると言えるのかと言えば、それは、釈尊が

上げました。阿難のこのこたえに、釈尊は、

善いかな、阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。

「阿難よ、それは誠にすばらしいことである。あなたは深い智慧と、真実で巧みな弁舌によって、五徳のわけを問うたが、それはあらゆる人々を哀れんでのことである」

とお誉めになり、五徳をあらわした理由を次のように述べられます。

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまう。世に出興するゆえは、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。無量億劫に値い難く見たてまつり難きこと、なおし靈瑞華の時にありて時にいまし出づるがごとし。

「如来は、何ものにも覆われず、さえぎられるこ

これまで見たことのない五つの徳をあらわし、神々しく光り輝いてお説きになる、特別の教えであるからだ、ということになります。

そしてその釈尊の特別のおすがたを発見し、釈尊にその理由を問うたのが阿難だったので。阿難の問いが、真実の利益である弥陀の本願・名号の教えを導いたので。そこで釈尊は、

今問えるところは饒益するところ多し、一切の諸天人民を開化す。

「阿難よ、今あなたが問うたことは、人々を利益するところがはなはだ多いであろう。それによって、あらゆる諸天や人々の心を開き導くことになるであろう」

と、阿難をお誉めになり、さらに次のように言われます。

阿難まさに知るべし、如来の正覚は、その智量り難くして、導御したまうところ多

し。慧見無碍にしてよく遏絶することなし
「阿難よ、如来のさとり智慧は、その深さをはかることは困難であり、どのような人々をも導きたまうであろう。智慧の眼を妨げるものはなく、さえぎるものはない」

かくして、釈尊がこの世にお出ましになった本当の目的は、阿難の釈尊への問いによって明らかにされたのでした。このところを聖人は、『浄土和讃』「大経意」第二首に、

如来の光瑞希有にして

阿難はなはだこころよく

如是之義ととえりしに

出世の本意あらわせり

と讃じておられます。

また、「出世の本意」については、第四首に、

如来興世の本意には

本願真実ひらきてぞ

慧義を問えり」であり、「真妙の弁才」は阿難が発したものでした。しかし、『如来会』では「微妙の弁才」は如来、すなわち釈尊に属するものとなっています。原文は、

善哉善哉汝今快問善能觀察微妙弁才能問如

来如是之義

です。傍線の部分を、「善く能く観察して、微妙の弁才をもって、如来に如是の義を問えり」と読めば、『無量寿経』と同様に、阿難が巧みな弁舌によって、五徳のわけを問うたという意味になります。しかし聖人は「微妙の弁舌を觀察して」と読んでおられるのです。こう読みますと、「微妙の弁才」とは、阿難が釈尊のお姿の上に拝見したものの、つまり「五徳瑞現」ということになります。

この部分をどう読むべきかについては、古くからいろいろ議論されてきたようですが、どうも主流は、聖人の読み方には無理があるとして、「微

難値難見とときたまい
猶靈瑞華としめしける

と和讃しておられます。

二、『無量寿如来会』の文

次に『無量寿経』の異訳である『無量寿如来会』から引文されます。しかし、この経からの引文は『無量寿経』からの引文に相当する部分すべてではなく、阿難が釈尊の問いに対して、自分の考えで質問したのですとこたえるところからです。

阿難のこたえに対して釈尊は次のようにおっしゃいます。

善いかな善いかな、汝、今快く問えり。善く能く微妙の弁才を觀察して、よく如来に如是の義を問いたてまつれり。

この文は、『無量寿経』では「善いかな、阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この

妙の弁才をもって」と読んで、『無量寿経』のように「弁才」を阿難に属するものとする理解のようです。

一方で、「弁才」を釈尊に属するものとし、迷いの一切の衆生を救済せんとする弥陀の本願の教えを巧みな弁才で説こうとされる釈尊のおこころを阿難が拝察したと聖人は読んでおられるのだと理解もあります。

また、「弁才」を釈尊に属させることによって、確かに阿難は自分の考えで問いを發したのではあるが、それは、弥陀の本願という最も尊く深い法を説いて、迷いの一切の衆生を救いたいという釈尊の大悲のお心に導かれての問いであったことをあらわすために、聖人はこのように読んでおられるのだと理解もあります。

私は聖人の読み方に従ったこれらの解釈に賛同したいと思います。